

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 蔡 麟
論文題目 汀江流域の地域文化に関する研究
論文審査委員 中川 學名誉教授、江夏 由樹教授、松永 正義教授

蔡麟氏による学位請求論文『汀江流域の地域文化に関する研究』は、客家の形成された地域のひとつと目される汀江流域(福建省西部、広東省東北部)のフィールドワークに基づきながら、そこでの地域社会の形成、発展のなかに、客家の形成過程を見いだそうとする意欲的な論文である。

客家(はっか)とは漢語方言のなかの一大分派である客家語を話す方言集団であり、漢族の中のひとつのエスニックグループ、客家研究に先鞭をつけた羅香林の定義によれば「民系」と言えるものだが、これまで一般には、宋末五代に戦乱を避けて南遷した中原の漢族の子孫であり、それ故中原漢族の古風をもっとも純粋に残すものとされてきた。客家自身もまたもっとも純粋な漢族の血統を持つということをもって、自らのアイデンティティーを表明する核とすることが多かった。これに対して早く中川學によって、そうした静的、主観的客家観が批判され、華南の地域社会構造の社会経済史的解明のなかで客家の形成過程が論じられることの重要性が指摘されており、その後瀬川昌久の文化人類学的研究など、いくつかの研究が行われてきた。蔡麟氏の研究もまたこうした流れのなかで、汀江流域地域社会の経済構造、社会構造、文化構造の解明のなかに、客家の形成過程を探ろうとするものである。

本論文は「序章」、上編三章、下編三章の計六章の本文、および「終章」から成るが、以下順をおって検討する。

「序章」では、これまでの研究史の検討のなかから、漢族文化の解明にあたっては、中原(中央)文化のみならず、周辺地域の独自性、多様性への注目が必要なこと、また客家文化をそうした周辺の独自の文化のひとつととらえ、周辺地域社会の生成、変容のダイナミクスのなかで解明すべきことが提起される。

つぎに本論は、上下二篇で構成され、上篇は汀江流域地域文化の形成と特徴を、その地理的特徴や生業形態分析から解明しようとするものであり、下編はそうした地域文化の形成、変容の過程を諸エスニックグループの同化、漢化の過程としてとらえ、科挙との関わり、地域共通語の形成などの視点から解明しようとする。

上篇第一章「汀江流域の地域文化の特徴に関する研究」では、これまでの方言研究の成果に依拠しながら、汀江流域とその周辺の客家地域におけるそれぞれの方言片の話し手集団を、その言語そのもののありかたから分類しつつ、それを現地調査と文献調査から得られた話し手集団の自己認識（客家アイデンティティを持つかどうか）と突きあわせることで、汀江流域の客家の独自性と多様性を浮かび上がらせる。蔡麟氏によれば、1、?南（江西省南部）に明末清初以前から住む人々と、明末清初以後の移民の言語は、ともに客家語と見なされるが、自己認識では前者は自らの言葉を「本地話」と考え、後者の「客家話」と区別していた。2、汀江流域の大埔は広東省に属し、その言葉も広東の客家語に分類されているが、他の汀江流域地域と同じ?西（福建省西部）の客家語に近い。3、広東省新豊県には、南からの移民と汀江流域からの移民があり、両者の言葉はほとんど同じで、同一の方言片に分類されているが、自己認識においては、前者は自らの言葉を「水源音」として、後者の「客家音」とはっきり区別している。4、広東省河源県の言葉は客家語と認められているが、現地では「河源話」は「客家話」ではないと考えられており、また?南での河源移民の言葉も、周囲からは「客家話」ではないと見なされている。5、汀江流域と梅江流域の言葉は、自己認識においてもともに客家語と考えられているが、互いに異なる点も多い。こうした点からすれば、客家といっても内部には、自己認識でも周囲からの認識でも客家ではないと考えられてきた多くの多様な集団をふくむのであり、また汀江流域の人々は?南や広東諸地域とは異なる独自性を持つ集団となっている。

つぎに汀江流域の内部でも、1、南北ではその言語にかなり大きな差があり、同時に北部の人々には客家意識が薄く、自らを客家とは考えていなかったのに対して、南部の人々には明瞭な客家意識がある。このことは南北で地理的環境、交通圏、産業構造などに明瞭な相違があることと関わる。2、また汀江流域の客家語の話者集団のなかには、漢族のみならず、?（ショー）族もふくまれる。

以上を要するに、汀江流域の社会集団は、周辺地域とは異なる独自性を持つとともに、内部に大きな多様性を持つ集団でもある。

本章の記述にはやや錯雑したところがあるが、全体としては現地調査、文献調査から得られた各集団の自己認識を、方言研究の成果と丹念に突きあわせることによって、上記の結論を具体的、説得的に導き出している。またこうした結論は、客家をおしなべて中原からの移民の子孫と考える見方への批判となっており、また地域社会研究からする客家研究の重要性を示唆していると言えよう。

上篇第二章「汀江流域の地域文化と山地文化」は、スキナーの地域系統論の示唆を受けて、汀江流域の地理環境の分析から、同地域の特徴を考える。全面積の八割に近い部分が山地、丘陵で占められる同地域は、閉鎖的な山間地と考えられがちだが、実は南は下流の韓江を通じて、潮州、汕頭という国際貿易港に通ずる交通網を形作り、北は瑞金から?江を通じて長江に至る、潮汕地域と長江流域を結ぶ重要な交通線を形成していた。こうした交通網は、宋代には官塩の輸送、明

代以降は潮汕地域での国際貿易の発達によって重要なものとなった。同時にこの地域は農耕に適さないため、商品作物や、この地に豊富な森林資源、鉱山資源を以て他地域と交易することに生計の道を求めることになった。こうしたことがこの地域に特有の山と海との結合を生みだした。

蔡驍氏はまたあわせてつぎの二点を指摘している。1、福建、広東、江西、湖南四省の境界地域は、ひとつの独特な交通圏を形成してきたが、この交通圏の言語は客家語であること。2、この圏内で汀江流域と同じような地理環境を持つのは梅江流域だが、両流域の人々には明瞭な客家意識があり、周囲からも総身止められていること。いずれも重要な指摘であろう。

上篇第三章「汀江流域の地域文化と農耕（民）型文化」は、上篇の中心をなす章で、この地域の唐宋以来の産業構造を分析することで、同地域の文化が農耕（民）型文化とは異なるものであることを論証している。それは客家が中原移民の子孫だとすれば、その文化は基本的には農耕文化であるとする従来の考えかたへの批判でもある。

蔡驍氏によれば、同地域では宋代にはまだ焼畑農耕が広く残存する一方、鉱業が隆盛を極めていた。明代以降は鉱業は廃れたが、食料はやはり他地域に依存しており、木材、製紙、煙草、藍などの商品や、鉄器、陶磁器、竹器、出版業などが、生計を支えていた。

本章では以上のような第一次、二次産業と、商業の実体が、各地域ごとに、丹念な文献調査と、現地調査によって明らかにされている。こうした実体の解明にはじめて手をつけたこと、なかでも鉱業の重要性を指摘し、その実体の解明につとめたことは、本論文の大きな功績と言える。下編第四章「汀江流域固有文化とその変容過程の特徴」は、考古資料、文物資料、州県という行政組織の設置過程、人口の変遷、宗族の開基時期の分析などから、この地域の「地域文化集団」の形成と、変容、定着の過程を素描している。

蔡驍氏によれば、この地には早くから古越族などの民族の痕跡が認められる。その後もこの地は「?蛮」、「諸苗」などの反乱の根拠地であり、また租税労役を逃れて逃亡した者たちも多く入りこんでいった。唐代にこれらを鎮圧するために始めて州が置かれたが、これは州県の設置の遅れた福建のなかでも、もっとも遅いものだった。その後寧化県を初めとして各県が設置されていったが、その過程は、中央と地域住民の抗争の過程でもあった。こうしてこの地域は徐々に中央の中華文化秩序の中に組みこまれつつ、単一の地域文化集団として統合されていった。

蔡驍氏はまたこの地域文化集団の統合過程について、つぎの三つの特徴に整理している。

第一、にこの地域文化集団を構成したのは複数のエスニックグループであること。これは従来単一の漢族が単一の先住民族との影響関係、あるいは混合を通じて客家が形成されたと考えられがちであったことに対する批判であり、客家の形成を地域社会の歴史的形成のダイナミクスのなかに見ようとする重要な提起だと思われるが、蔡驍氏の想定する複数のエスニックグループの実体が必ずしも明らかでないため、まだ仮説ないし問題提起の域にとどまるものといわざるを得まい。

第二に、その同一化の基本的方向が「漢化」であったこと。これはそのとおりなのだが、なぜそうなのかという問いはやはり必要だと思われる。

第三に、その同一化と漢化は、北部の寧化から地域全体に広がっていき、南宋末頃にはひとつの客家集団として統合され、明代中葉に質的転換を遂げたということ。蔡驥氏は早期客家語の代表とされる汀州話が南宋末頃に形成されたと考えられていることを、客家という集団への統合の指標としている。また人口の変遷と宗族の開基時期の分析、および明代中葉から南部でも科挙の合格者が始まったこと、同じ時期に?族的習慣が消滅したこと、などから明代中葉頃から同地域の社会は常に移動する移動型から定住型へと質的転換を遂げたとしている。

下編第五章「汀江流域における諸エスニック・グループの文化的同一化と漢化（一）」は、同地域における科挙の実体の記述を中心としながら、地域社会集団の動態を分析しようとする。第一節では、各地方志による科挙合格者数の調査から、宋代に合格者が飛躍的に増えること、初めは北部の合格者が圧倒的に多いが、明代中葉頃から南部の方が多くなることが示される。第二節では、?西廖氏の族譜の分析、上杭県白砂鎮の現地調査から、宗族や地域コミュニティーの統合、形成に科挙が深く関わっていることが示される。さらに自らのルーツを寧化に求める伝承の成立は、その伝承を支える人々が自らのアイデンティティーを中原漢族文化に置くようになったことを示すものとする。第三節では、?族の代表的姓とされる藍、雷、鍾の三氏について、汀江流域のこれらの氏族の科挙の受験状況、およびそれと関わる地域社会での地位の分析から、これらの氏族も周辺の他の住民と同じく漢化の道を歩んできたことが示される。

下編第六「章汀江流域における諸エスニック・グループの文化的同一化と漢化（二）」では、宋代の鉱業と客家の形成が密接な関わりを持つことが、客家語を軸として論じられる。蔡驥氏の指摘では、近年の漢語研究では客家語は音韻上は唐宋時期の中原音に近いが、語彙的にはミャオ・ヤオ語とチワン・トン語に近いとされ、また漢語における金属名詞の語源が主にトン・タイ語と関連するとされている。さらに唐宋期の主要な鉱山と客家語の分布は一致する。これらのことから客家という集団の形成をうながしたものは、鉱業であると蔡驥氏は推測している。鉱業は宋代におけるこの地域の産業の中心であり、その生産のための人口の吸引力が、出自の異なる多くの人を集め、その流通が広範な地域の相互交渉を必然とした。こうした相互交渉が客家語という共通語を生みだし、客家という集団を形成した、というのが蔡驥氏の想定するところだと思われる。この鉱業との関わりを実証的に指摘した点は、本論文の大きな功績と考えられる。

「終章」では、まとめとして客家という呼称そのものが検討される。蔡驥氏は客家（HAK KA）と「SAN HAK」（山人）という呼称のつながりに注目し、鉱業に従事する人々が他の山人と区別する意味で「SAN HAK」と呼ばれたのが客家の初めであり、それらの人々が漢化され、中原文化秩序に組みこまれていくにしたがって、漢族の一支としての客家という観念が生まれたとしている。結論そのものにはなお異論もありえようが、客家という集団の形成を、多様な出自を持つ人々の同化、統合の過程と、その集団が中原文化秩序に組みこまれ、漢化して

ゆく過程との、ふたつの側面を持つ段階的發展として理解しようとする方向性は、十分傾聴に値するものと考えられる。

以上の論述を通して本論文が明らかにしたことは、つぎのようなことである。

- 1、汀江流域の客家は、他地域の客家とも異なる独自性を持ち、また内部も多様な社会集団である。
- 2、そうした独自性は、該地域の地理的環境、そこからする社会、経済構造に規定されたものである。
- 3、そうした社会集団は、漢族をふくむ多様なエスニック・グループの同化、統合によって形成されたものである。
- 4、同化、統合の契機となったものは、宋代における鉱業の發展である。
- 5、明代以降鉱業が廃れ、材木、製紙、煙草、出版業などへの産業の転換が起こったことが、集団の定住化をうながし、集団の質的变化をもたらした。
- 6、そうした変化はまた、科挙体制を媒介として、集団の中華文化体制への組み込みをうながした。

こうした論点を、丹念な文献調査と現地調査の突き合わせによって実証的に明らかにした点に、本論文の大きな価値がある。

しかしながら、いうところの明代における質的転換をもたらした産業構造の変化の実態や、とりわけそこで大きな意味を持ったであろう海外貿易との関わりについての分析の不十分な点は、宋代鉱業の發展に始まったこの地域の社会集団の發展を歴史的に辿る上での弱点になっているように思われる。また個々の宗族や地域での科挙との関わりの実態は述べられているが、より広く中央権力と地域社会の関わりの中での科挙体制の意味を問う視点に欠けているのは、それがなぜ統合が漢化の方向で行われたのかという問いと関わるだけに、残念な点である。これらは蔡驥氏の今後期待すべき課題であろう。また該地域に先住し、または移住してきた諸民族の実態、論文中でいえば?蛮、諸苗、?族などの実態や関わりが明らかでないことも問題だが、これは蔡驥氏の問題というよりは、いまの研究のレベルの問題と言えよう。

以上のような問題点はあるものの、蔡驥氏の多様な方言を聞き分ける能力が、示唆に富む現地の証言を引き出している点、また氏の扱う文献資料が、丹念な現地調査によらなければ入手し得ない種類のものであることは、この論文のオリジナリティーを保證するものとして高く評価できる。また単なる一地域研究に終わるものでなく、中国全体のなかで地域の特性を把握しようとしていること、換言すれば、中国とはなにかという問いのなかで、客家とはなにかという問いを解明しようとしている本論文の志向性は、それを裏づける実証の手堅さとともに、十分評価しうるものと考えられる。

以上のような本論文の審査の結果、審査委員会は本論文を学位請求論文にふさわしい学問的業績であると考え、口述試験の成績をも考慮して、一橋大学学位規則第4条第1校の規定に準じた

取り扱いにより、蔡驩氏に一橋大学博士(学術)の学位を授与することが適当であると結論する。

二〇〇一年二月一四日